

# 石巻市内で活動している社会福祉法人のご紹介

## 第9回インタビュー

### 社会福祉法人一視同仁会

平成28年4月から改正社会福祉法により、社会福祉法人による「地域における公益的な取組（社会貢献事業）」の実施が法人の責務として位置づけられました。

この取組は、次の3つの要件をすべて満たすことが必要となります。

- (1) 社会福祉事業または公益事業を行うに当たって提供される「福祉サービス」であること
- (2) 「日常生活又は社会生活上の支援を必要とする者」に対する福祉サービスであること
- (3) 無料または低額な料金で提供されること

具体例としては

- ・夏祭り等、イベントの開催による住民間のつながりの再構築
- ・働き手が少ない商店街との連携による就労支援
- ・公共交通機関がない地域での移動支援や買い物送迎支援
- ・災害支援ネットワークによる避難所支援
- ・刑余者の自立支援に向けた自立準備ホームの登録

などが挙げられます。

石巻市内にはたくさんの社会福祉法人がありますので、実際にどんな社会貢献事業に取り組んでいるのか、順番にご紹介していきたいと思います。

今回は「社会福祉法人一視同仁会」さんをご紹介します。

インタビューにお答えくださった方は、理事長の遠藤早苗さんです。

### 社会福祉法人一視同仁会

- 法人所在地 石巻市鹿又字八幡前15番地
- 電話番号 0225-86-5088
- ウェブサイト <https://hanamizuki1999.com/>
- 設立年月日 平成10年11月4日
- 事業



地域密着型介護老人福祉施設入所生活介護（地域密着型特別養護老人ホーム）、短期入所生活介護、通所介護事業、訪問介護事業、居宅介護支援事業所、地域包括支援センター、サービス付き高齢者向け住宅、放課後児童健全育成事業

#### ■施設・事業所

特別養護老人ホーム花水木、花水木介護センター、ショートステイ花水木、居宅介護支援センター花水木、石巻市河南地域包括支援センター、花水木デイサービスセンターもとまち、サービス付き高齢者向け住宅この花（秋田県湯沢市）、ヘルパーステーションこの花（秋田県湯沢市）、鹿又地区第一・第二放課後児童クラブ

#### ■社会貢献事業

##### (1) みやぎ教育応援団

家庭・地域・学校が協働して子どもを育てる環境をつくるために、子どもの教育活動を支援する花水木として宮城県教育委員会に登録し、子どもの学習・体験活動の充実・活性化を支援しています。

宮城県石巻北高等学校の校外授業（地域貢献授業、野菜貢献授業等）、石巻市立桜坂高等学校（桜プロジェクト）、石巻市河南東中学校校外学習、石巻市鹿又小学校校外学習（総合学習授業、町探検等）、放課後こどもクラブBremen（サッカー遊び）等

##### (2) 災害時の花水木と地域の相互支援

花水木は福祉避難所として指定避難所での生活が困難な要援護者のために開設する二次的避難所として石巻市と協定を締結しています。東日本大震災では花水木と地域の相互支援として、地域住民からは物質的な支援だけでなく「大丈夫か」の声掛けなど、心に働きかける精神的な支援をいただきました。花水木から地域への支援は、石巻市介護保険課（現・介護福祉課）を通し、特別養護老人ホーム花水木へ被災した要支援、要介護者の受入をしました。また、近隣避難所の石巻北高校へは施設職員派遣や福祉用具貸出の支援をしたり、震災発生から1か月後の4月18日から8月26日（避難所閉鎖）までの期間、月曜日から金曜日の16時から18時まで、避難所生活者と地域被災者に花水木介護センターの大浴場を開放し入浴支援をしたりしました。

##### (3) 地域や利用者の家族と利用者・職員をつなぐボランティア

地域住民が生涯学習などから得た、様々な特技や得意分野を当施設での活動に活かし、そのボランティア活動により利用者が心豊かな時間を過ごすことができ、ボランティアさんには「やりがい」を感じていただいています。施設内には絵画や書などの地域住民の作品を展示。その作品は利用者や職員を癒やし、楽しませています。また花水木には、地域住民が入所者・利用者の災害時避難誘導支援（花水木非常時協力員）や余暇活動支援をする花水木ボランティア会があります。

—今回は介護事業サービス全般を担う社会福祉法人として、一視同仁会さんのご紹介です。まずは、法人のご説明からお聞かせ願います。

**遠藤：**社会福祉法人一視同仁会は主に旧河南町鹿又を拠点とし、石巻市中央に「花水木デイサービスセンターもとまち」があり、秋田県湯沢市に「サービス付き高齢者向け住宅この花」と、その中にヘルパー事業所を併設し、その他にも地域の方の交流や活動をする場所を提供するためにブックカフェを併設しています。

事業については（記載のとおり）、主に老人福祉を行っていましたが、令和4年4月から放課後児童健全育成事業として放課後児童クラブを運営することになりました。これまで石巻市で運営していましたが、民間事業所に委託を進めており、鹿又小学校の第一、第二放課後児童クラブを一視同仁会で運営することになりました。

事業所としては、在宅生活を支える地域包括支援センターからケアマネジャーの部門、そして入所施設まで揃っております。

施設の全景ですが、つい先日大規模修繕が完成し、外壁の塗り直しにより、ふわっとした優しい雰囲気イメージチェンジができました。また、2階建ての備蓄倉庫を増設しました。というのも、普段は備蓄倉庫として使用しますが、水害などのいざという時の災害に備えて、特養の入居者が一時的に安全な場所に垂直

避難ができるように2階建てにしました。



右が理事長の遠藤早苗さん

—近くに大きな川として、北上川がありますよね。

**遠藤：**堤防から200mしか離れてないので数年前の台風19号の時は、須江しらさぎ台にある「しらさぎ苑」（グループホームなどを運営）さんの方へ避難しました。その時も大雨の中、入居者さんが雨に濡れないように気を配りながら何度も往復し、とても大変でした。また、その道中も大雨でいくらワイパーをかけても前が見えなくて、すごく怖い思いをしました。こういった経緯もあり、特養の入居者が一時的に垂直避難できるようにしてあります。

—震災当時、川を津波が遡上してきたのを職員が見たと聞きました。

**遠藤：**あの時は本当に土手ギリギリでしたね。地域の方が「避難するなら一緒に手伝うよ」と集まってくれました。そこでいざ避難しようとしたとき、近くの避難場所は被災者の避難所となるので、高齢者施設利用者が入ることができなかったり、その他の避難所でももう人がいっ

ばいで入れなかつたりと避難するのが難しく、結局施設にとどまることになりました。ギリギリまで1階で過ごし、屋根はなくてもいざという時は職員みんなで利用者さんを屋上へ避難することにしました。その時、地域にちょうど自衛隊を退職された方がおられ、施設と一緒に泊まってくださいました。すると、夜中に川の水位を見に行ってくれて、「施設長、水位が上がっていないので大丈夫です！」と報告してくれました。元自衛官の方は報告するときは上官の人がすぐ判断できるように訓練されているようで、あの時この言葉で「ここに残ろう！」と決心ができました。その方には本当に感謝しております。



花水木の外観

—それを踏まえて、台風19号の時は「しらさぎ苑」さんへ避難したということですが、普段から何か協定を結んでいるといったことをしていたのでしょうか。  
**遠藤：**震災後に「有限会社しらさぎ苑」さんをお願いし協定を結びました。当時は近くの学校へ避難することを考えていましたが、市や県へ問い合わせても結論

が出ず、民間事業所を頼り、「しらさぎ苑」さんをお願いすることとしました。すると、「しらさぎ苑」の社長さんに快諾していただき、やはりこのようなときは同業者が一番頼りになると改めて実感しました。「しらさぎ苑」さんは「デイサービスセンター虹の丘」も運営しているので、台風の際はそちらに20数台の公用車も職員の車も全て避難することができました。

その時の話ですが、私と男性スタッフと宿直者が3人で夜に施設残りしました。次の日の朝に、「大丈夫だったなあ」と安心しながら、入居者さんが戻ってこられるように準備をしようかとカーテンを開けていると、ごみ箱など下に置いてあるものが全てベッドなど高いところに上げられていて、もし水が来ても大丈夫なようにと、職員のみなさんが自分たちで気づいてやってくれていたことに、朝一人で感激したことを覚えています。このような経緯もあり、備蓄倉庫ではありますが、やっと念願叶って一時的にも垂直避難ができるように整備できました。

災害時や避難等については、「災害時の花水木と地域の相互支援」ということで施設と地域の協力体制があります。

地域の方から花水木に支援してもらったり、花水木から地域の方を支援したりということでした。震災当時は福祉避難所として指定はなかったんですが、その後、福祉避難所として石巻市と協定を締結しました。

あの時は施設としてやるべきことは、当たり前のようにいろいろとあり、要支援や要介護の認定を受けている方は、自宅が被災して避難所で生活することは困難なので、特養として定員の倍以上の人数を受け入れていました。避難所には、経管栄養の方で栄養剤がないため砂糖湯やお湯を入れていた方がいたり、津波に流されて助かって避難所にいる方で微熱が続いていたり、においなど衛生的に良くない状態のまま生活していた方もおり、そういった方を受け入れました。熱がある方などは特に感染症の恐れもあるので一旦デイサービスの静養ベッドで待機してもらい、心配がなければ特養内で生活していただきました。当時は電気もなく氷も作れない状態だったので、施設にあるもので何とか対応しました。

——電気が使えるようになったのはいつ頃だったでしょうか。

**遠藤：**ここは施設だからということもあってか、専門業者の方が他の大きい会社を先に回っているとのことで、遅くなりました。周りの住宅に電気がついても、花水木だけついていない状態で暫くかかりました。水道も同様ですね。

——生命に危険を及ぼす可能性が高いという意味では、特養のような施設を優先的に復旧すべきと思いますが。

**遠藤：**そこに行き違いがあるようで、福祉避難所として指定がないと行政の方でも気づかないようです。

また、水も汲みに行っていました。地

区に巡回してくる給水車は住民の方のためであり、施設への給水ではないと断られました。施設の貯水槽への給水に来てくれたのは秋田県湯沢市の給水車で、石巻市の給水車は来なかったです。井戸水をもらったり、職員と並んで汲んできたりと、これではせっかく助かった入居者も、職員も疲労で身体がもたないと感じ、私の役割はもはや情報発信しかないなと思い、東京の知り合いなどを頼ったり、いろんな所にメールを送ったりしました。

あとは、石巻市役所周辺の水が引いたタイミングで、3月13日か14日だったと思いますが、職員二人に介護保険課（現・介護福祉課）へ行ってもらい、「助けなくてはいけない高齢者がいれば施設として受け入れます」と伝え、と同時に「水、消毒用アルコール、ガーゼ、脱脂綿がないのでこれらがあれば高齢者の方を受け入れられます」という要望を口頭ではなく紙に書き出しました。それから石巻市が手配してくれて必要な物資が届くようになりました。

そこから福祉避難所の指定になるわけなんですけど、情報発信のアクションは非常に重要なんだなと痛感しました。やらなくてはいけないことは、もちろん指定になっていなくてもしますが、いろんな方を助けるということはそれだけ物資も必要になるため、やはり思いだけではなく、きちんと指定されることも重要と感じました。

——指定福祉社避難所という一つの地域

貢献・役割であり、地域の方、介護者の方にとっても安心できるのかなと思います。

話を伺っていて、震災当時は津波被害を受けた地域も大変でしたが、こちらはこちらで大変でしたね。

**遠藤：**津波が到達せず残っている施設として、やらなくちゃいけないという思いでした。そのためデイサービスも、今は主に旧河南町の利用者が多いですが、当時は沿岸近くでデイサービスを営業できているところがなくて、湊・渡波まで送迎したり、遠くの避難所にも送迎に行ったりしました。

3月下旬に「いつまで休んでいるんだ！早く再開してくれ！」という声がありました。この周辺は電気が復旧していなかったの、テレビも観られず、沿岸部がどういう被害状況か分からなかったようですね。給食もある物しか出せずいつもの給食ではないこと、ボイラーが復旧していないのでお風呂にも入れないことを伝えても、それでもいいから再開してくれという声があり、4月1日にデイサービスを再開しました。

再開すると、いろんな所から利用者が集まってきて、40名定員を超えてきたので宮城県の成人高齢班（現・高齢者支援班）へ「定員を超えて受け入れたい」と要望すると、「上の方から指示がないので少し待ってください」と言われました。上ってどこだろうと考えたときに「厚生労働省だ！」と思い、東京へ電話をしま

した。ちょうど厚生労働省の電話番号が記載されている通知が来ていたのを思い出し、電話をしました。すると、「よく電話をしてくださいました！」と電話を受けた担当者が言ってくださり、「そのような理由で、待てないんですよ。では、受け入れるだけ受け入れてください」とのお返事をいただきました。そして、受け入れるにはどのようなことをすべきか、注意点などを確認したところ、「定員オーバーしているけど、どうしてその方を受け入れなければいけないのかの必要性、理由をきちんと記録していただければ問題ありません」ということで、ホールも50人が利用できる広いホールでしたし、スタッフもあの当時は求人を出すと次々に応募してくれましたので、受け入れることができました。

それから、毎日車のタイヤに釘（被災して解体した家屋の釘）が刺さるんです。誰かに意地悪されているのかと思うくらい刺さり、パンクしました。

あとは、訪問入浴も当時していたので、発電機と水を汲んで女川町まで行きました。やっぱり、無我夢中でしたね。特養も4人部屋に7人入っていたこともありましたが、燃え尽きるってあるんだろうか、今日頑張れば明日楽になるんだろうかと思っていたんですが、次の日もまたいろんなことが起きるんですよ。あの頃は毎日が大変でした。

——災害に関しては、復興というゴールが見えるんですが、コロナウイルスなど

の感染症はゴールが見えないですよ。その中で事業継続計画（BCP）（※1）が令和3年度から義務化となりましたが、このような経験があったからこそ計画を立てやすいのかなと思います。いかがですか。

**遠藤：**そうですね。被災した時に一番大事というか、計画作るときにもこれが一番大事だと思ったのは、「役割分担」ですね。通常は介護や看護だけの業務で十分なのですが、有事の際には広報の担当をしたり、物資の受け入れ担当をしたり、いろいろ情報収集したり、洗濯当番をしたりと、今までは業者さんが洗濯していたのを自分たちでしなくてはいけないなど、ホワイトボードに係を書き出してみんなで動きました。何かあったときは一番にこういった係をきちんと決めておくことがスタートになります。

——災害や感染症対策などのガイドラインでも役割分担を明確にするように書いてあるので、そういったノウハウがあればやりやすいと思いますし、先ほど、避難するときに地域の方が「一緒に避難してあげるよ」といったお話がありましたが、BCP自体にも「災害時には地域の方と連携をしながら」と明記してあるので、もう既に実践されていると思いました。

**遠藤：**施設のある鹿又地区の皆さんって凄いですよ。皆さんよくここを「おらほの施設」と言ってくれる方々なのです。

鹿又地区では、花水木のための非常時協力員がいるんです。夜間に火災などが

あったときに、夜勤者だけで入居者さんを外へ避難させるときに、例えば出入口まで職員が誘導して、そこから外に出してくれればスムーズに避難できる、そのようなときに協力してくれる方が現在男女で13名いらっしゃいます。平成19年の立ち上げ当時は、皆さんまだお若かったので、走ってもすぐに駆け付けられましたが、今は「走るの難しいけど、どこから出てくるとか、どこに逃げればいいのかを施設に集まってきた住民に言ってちょうだい！手伝うから！その係を私たちがするから！」とおっしゃっています。野次馬と協力員の区別をするために、見て分かるように目立つ帽子も作りました。

ただ、立ち上げ当時、消防の方に反対されました。「この方たちが煙に巻かれるなど、二次災害の危険性がある」との理由です。しかし、このような協力がないと入居者の命を助けられないこと伝え、煙に巻かれないようにするために出入口までとしました。

あとは避難訓練に来ていただいて、一緒に誘導していただいたりしていたので、あの震災当時もみんなが混乱している中で「非常時協力員です！」と2名の方が駆けつけてくれました。あとになって「あの時、それぞれが自分や家族の命を守ることで精一杯で、いろいろと家のこともあるだろうに、どうして花水木に来てくれたんですか」と聞いてみましたら、「自分は非常時協力員だと思っていたから、

それは責任だと思っていた。施設のスタッフは女性が多いし、入居者は寝たきりの方もいるので、自分が行かないとダメだと思ったので来た」とおっしゃり、凄い責任感を持っているのだと感じました。

夜も寒いだろうと、ストーブを持って来てくれたり、夜もちょこちょこ顔を出してくれたり。なので、日頃から地域の人と顔を合わせていれば、そういう有事の際には「花水木！」と頭の中に浮かんでもらえるんじゃないかなと改めて思いました。



花水木非常時協力員の皆さん

——地域にある施設として、地域とこういった取り組みをしているという素晴らしい事例としてもっと皆さんに知っていただきたいと思いますね。

また、近年に起きた学校や施設での痛ましい事件などもあり、警戒しなくてはならなくなって施設と地域の距離が大きくなってしまおうという弊害がありますが、逆に地域の方が気軽にいつでも入れるような施設だからこそ、地域の方が施設での異常や変化に気づいたり、災害時に駆

けつけてくれたりという状況があるのかなと思います。そういったオープンな関係が理想ですが、なかなかその垣根を取り払うのが難しいのが現状だと思います。

**遠藤：**そうですね。私ははじめ、事務員としてこの施設へ来ました。その時、ボランティアで民謡や習字を教えてくれる方をお願いしたいと上司に言うと、「利用者に何かあったらどうするんだ。ダメだ」と断られました。でも、「何かあったら」の「何」とはなんだろうと考え勉強したのが、宮城県社会福祉協議会のボランティアコーディネーター養成講座でした。

そこで、地域の方を施設にボランティアとして受け入れるには、ガイダンスが必要であり、法人としてどのような考えを持っていてどのようなことをしてもらいたいのか、また、ボランティアの方がどのようなことができるのかなど、きちんと話し合いをすることが大事だということ学びました。そして、個人情報の保護も徹底し、ボランティアさん全員に誓約書として署名もいただきました。

地域の方々は、趣味で色々なことを勉強しており、職員が利用者の方へ教えるよりも地域の方々の方が詳しいし、上手なんですよ。民謡、習字、ピアノなど住民に声をかけて、午後から1時間程度お招きして発表していただいたくということコロナ禍の前にはしておりました。次々いろいろな方がいらっしゃってきて、日本舞踊だったりコーラスだったり、しかしそれができなくなってし

まいりました。昨年コロナが少し落ち着いたときに、マスクをして距離をおいて民謡を歌ってもらいました。すると久々の訪問に利用者の皆さんが大いに盛り上がりました。あとは中央にあるデイサービスでは月一回、習字を教えている方に来ていただいています。



習字ボランティアの遠藤鶴蓉さん

——入所者にとっては、施設内の職員や利用者間のコミュニケーションだけになってしまうので、元々住んでいた地域の住民がボランティアとして来ることは、入居者にとっては施設に入っているだけでも地域感を感じられて良いですね。

**遠藤：**そうですね。近所の方がボランティアとして来てくれると、施設にいる方も「あ～、久しぶりだね」などと会話になったり、手を握り合いながら再会を喜ぶ姿があったりします。皆さんの絵画や書道などの作品は施設内に展示しています。

また、花水木には非常時協力員のほかにも「花水木ボランティア会」があり、社会福祉協議会からも表彰をいただいて

いるんですよ。

——宮城県社会福祉協議会会長表彰ですね。



民謡ボランティアの楯石光弘さん

**遠藤：**こういった活動をどこでも簡単にできるものだと思っていたら、そう簡単なものではないんだと、ボランティアコーディネーターを勉強して、段取りさえ踏めば同じようにできると思っていたが、施設が増えるようになってより感じました。こちらの施設側だけではなく、改めて、ここ鹿又の地域の方々がいるからこそできるのであって、良い人たちに恵まれているなあと、本当に地域の人たちがあって、私なんかが施設長として務まっているんだと思います。

——それはお互いが存在してのような気がします。昔は施設というと地域からは「なぜ施設を建てるんだ」と否定的なところもありますし、施設というものに対して、運営側と住民の考え方など、お互いが合致しないとうまくいかないものなのかもしれません。それがうまくいったのが、この花水木さんなんだろうなあと、思います。



**遠藤：**あとは、ここの行政委員さんや主な出会った方たちが凄く動いてくれて協力してくれたのが、住民の方々も協力してくれたきっかけになったのかなと思います。

——そう思います。やはり地域の代表の方がキーマンになりますので、いかにその方々のハートを掴むかが大事ですね。そうすると施設内を見ていただくのは一番いいことかもしれません。



介護ロボ「HAL介護支援用」を装着して介護体験

**遠藤：**みやぎ教育応援団（※2）についてですが、家庭・地域・学校が協働して子どもを育てる環境をつくるために、子どもの教育活動を支援する花水木として宮城県教育委員会に登録し、子どもの学習・体験活動の充実・活性化を支援しています。

石巻北高校がこちらで校外授業をしたときは、介護ロボを装着して介護体験をしました。また、農業を勉強している生徒さんからは花壇を貸してほしいということで、道路沿いの花壇は北高校の生徒さんが綺麗にしてくれています。

河南東中学校の校外学習では、理学療法士がリハビリ機器の体験指導をしました。

——子どもたちのこういった学習は将来の人材育成と考えると、施設の持っているノウハウだとか、一つの地域の資源としてもそうですが、若いうちに知っておくと大人になってからも他人に対する接し方だったり、認知症の方や、身体の不自由な方に対してどのような関わり方をすればいいのかを考えたりと、いろんな発想ができるのかなと思います。



理学療法士による高齢者用リハビリ機器の体験

**遠藤：**鹿又小学校の子どもたちは今、おじいさんやおばあさんと一緒に住んでいない子が多くて、ここに総合学習で来るとお年寄りの方とどう話していいのかが分からない子がいるので、話し方は低い声（低音）の方がいいだとか、ゆっくりお話しするだとかをマネしてもらったりして、相手が分からないときはもう一度お話してみてもと教えると、利用者が反応するようになり、関わり方が分かってきたようでした。すると子どもたちから先

生に「もう一度行きたい」との声があったとのことで「初めはどう関わっていいかわからない」、「ちょっと怖いと思ってたけど、とても優しいし、今度はこんなことをしてあげたい」などの意見が出たようで、関わってみることでお話の仕方が分かってくるんですよ。

あとは、桜坂高校の「桜プロジェクト」というのがあり、就職先を選ぶうえで石巻にはこんな会社が沢山あるんだよということを知ってもらうために、学校側が決めた会社を体験させるプロジェクトがあるんです。それで花水木に来た生徒に、介護施設の印象を聞くと「怖いと思った」とのことでしたが、体験の終了時に感想を聞くと、「みんな笑ったり笑顔だったりして、入所している人みんな優しかった」、「イメージと違った」と言っていました。こういった施設で授業として受け入れることで、児童生徒にとって全然分からないものが少しでも分かってもらえれば、将来大人になってからいいのかなと思います。

——現在、多様な方が一緒に生活していく世の中になっています。就職で事務や販売をするうえでも、人と人との関わりを持たない職業はないので、世の中にはこういった方もいるんだといったイメージをするにも、就職活動前にこのような体験ができることは、若い学生さんにとってみれば仕事の幅を広げるいいヒントになるのではないのでしょうか。



石巻北高校生徒による花壇整理

**遠藤：**今はいいですね。学校でそういう教育があって。私たちの時代にはまったくなかったですもの。

——はい、うらやましいです。

あと1点気になったことがあるのですが、秋田県湯沢市との接点というのは何かあったのでしょうか。

**遠藤：**前々理事長が秋田県湯沢市の方です。

——雪深いところですね。サービス付き高齢者向け住宅とヘルパーセンターのほか、ブックカフェを行っているということですが、具体的にはどんな内容でしょうか。

**遠藤：**「スタートライン」というひきこもりの支援グループの定例会の場所を提供しています。湯沢市でもひきこもりが課題になっているということでしたので、ブックカフェの本の整理や掃除など就労支援の受け入れの体制もしています。

雪は、カラオケ教室でブックカフェを使用していた近所の方がローダーで雪かきを手伝ってくれていました。もう積雪

がものすごく雪かきというレベルでは対処できないんです。雪を置く場所にある雪の壁は、私の身長の高さになるんです。

—それは大変ですね。そろそろお時間になりましたが、最後にもう一つお聞きしたいことがあります。今後の社会福祉法人連携について何かお考えのことはありますか。

**遠藤：**外国人雇用を積極的考えている法人さんと連携をして、まだ受け入れてはいませんが「一緒にしましょう」と誘っていただいています。その法人さんからは「一緒に紙おむつを買いませんか」などと物品調達とか人材雇用に連携しませんかとお誘いを受けているので現在考えているところです。

—制度に基づいたサービスでは解決できない方や多問題を抱える家族など、隙間がなく支えられるように法人間連携が大事になってくると思いますが、石巻でもかなりの法人数があるので児童から高齢者までそれぞれに特化した法人間で何かできることがないかと思いますが、その辺についてもお聞かせ願えますか。

**遠藤：**そうですね。他の法人さんとの連携とまでは言ってないですが、ちょうど地域包括支援センターとヘルパーの事業をしていると、要介護の状態じゃないけれど高齢になって「郵便物を出しにいけない」とか「ゴミを出しに行けない」とか「除草作業ができない」とか「灯油を入れてほしい」などをちょっとした

高齢者の困りごとが相談に上がってきたので、元気な高齢者が手伝うという「新田町よこよこ会」を作りました。「横と横を繋げる」という意味ということで鹿又の住民さんが名付けてくれました。

どこで困っているかの情報は地域包括支援センターが窓口になり、一視同仁会としてはごみ袋やグローブなどの物品の提供をしています。始めは30分100円とかで一視同仁会から地域の方にお礼の形でお金を支払っていたんですが、住民さんからは「お金を貰うとやりにくい」と言われ、途中からお支払いをしなくなりました。その方たちが除草作業に行ったり、自ら片付けができない方の家の掃除などを手伝ったりなどしているんですが、こういった活動を法人同士がまとまって全地区に広がっていけば良いんでしょうね。

—今の話は、まさに介護予防・日常生活支援総合事業の住民主体による「介護予防・生活支援サービス事業」(※2)のものだと思います。それが広がっていくことが理想的です。

**遠藤：**やはり地域の中にみんなをまとめてくれるリーダーとなる方がいるとないのとでは違うと思います。

—花水木さんと鹿又地区との関係のように、各地区に広がっていくと良いですね。

社会福祉法人の連絡会というのが今までなかったので、こういった話など、他法人との情報交換ができる場があると良

いですよね。

**遠藤：**高齢者施設としては（老人福祉施設協議会として）組織化されているんですが、子どもや障がい福祉の分野との接点は確かにありませんので期待したいところです。

——本日は貴重なお話を大変ありがとうございました。

**遠藤：**ありがとうございました。



— インタビューを終えて —

日頃から一つ一つ積み重ねてきた努力が地域の理解を得て、地域との相互扶助を大切にしながら法人運営をなさっていると強く感じました。

また、あの東日本大震災の教訓を踏まえ、次の災害への備えも万全とし、利用者や職員の命を守る柔軟かつ迅速な体制整備は、経験が成し得た賜物だと思いました。

これからは放課後児童クラブの運営も担うということでしたので、子どもから高齢者まで幅広い世代と関わりを持つことで、これからも地域にはなくてはならない存在であると感じました。

地域福祉事業を行っている石巻市社会福祉協議会としては、地域と密着した事業展開をなさっている一視同仁会さんの存在が心強く感じられるインタビューとなりました。

今後も地域を支えていく存在であり続けるために、共に頑張っていきたいと思えます。

#### ※ 1. 事業継続計画（BCP）

大地震等の自然災害、感染症のまん延、テロ等の事件、大事故、サプライチェーン（供給網）の途絶、突発的な経営環境の変化など不測の事態が発生しても、被害を最小限に抑えながら必要なサービスは継続し、休止したサービスは可能な限り短い時間で再開させることをどのように進めていくか、方針、体制、手順等を示した計画のこと。業務継続計画とも言う。

#### ※ 2. [みやぎ教育応援団](#)

家庭・地域・学校が協働して子どもを育てる仕組みとして設立され、子どもの教育活動を支える企業・団体・個人等を「みやぎ教育応援団」の団員として認証・登録し、学校の授業や放課後の活動、PTA活動などの場面で活躍してもらうことで、学習・体験活動の充実と活性化を図っている。

#### ※ 3. 介護予防・生活支援サービス事業

多様な生活支援ニーズに応えるため、従来の介護保険における介護予防サービス（デイサービスやホームヘルパー事業）と同様のサービスに加えて、NPO法人や民間事業者、ボランティアを含めた多様な担い手による訪問サービス、通所サービス及びその他の生活支援サービスを提供するもの。